ナルトの世界に転生する事になった訳だが

井平遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナルトの世界に転生する事になった訳だが

【Ｎコード】
Ｎ６６３５Ｚ

【作者名】
井平遼

【あらすじ】
突然だが、ナルトの世界へ転生する事になった。
神様からちょっと強い眼を貰って頑張ろうと思ってたのだが、産まれる性別を間違えたんだ。
原作順守とかブレイクとか、もうどうでもいいから強く生きるよ。
素人による処女作。そして亀更新必至ですがどうぞよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

読む専でしたが、とち狂って投稿しちゃいます。
どうぞお手柔らかにお願いします。

プロローグ

俺は真っ白な空間に独り佇んでいた。
なぜここに居るのかは分からない。気がついたらここに居たわけだ。
「んー……これはテンプレの予感がするね」
二次創作、ネット小説などでよくある転生前によく似ている。
「待たせたの」
これからどうなるのか。どんな世界に転生するのか。むしろ夢落ちだろこれ。等と考えていると、威厳たっぷりの声が響いた。
「えっと、神様ってやつで合ってます？」
むしろ外れて下さいと思いつつ確認をする。
「うむ、一般的にそう呼ばれておる」
合ってた。ちくしょう。
「て事は、俺は死んじゃってこれから転生なんてしちゃうとか？」
「……話が早くて我は助かるのじゃが……もう少し動揺とかせんのか」
呆れた声が響く。

なんか人型の光が喋るのってシュールだな。

「ま、いいじゃないですか。ごねなくて。で、神様か誰かのミスで死んじゃって、現世に戻すのは無理だから異世界に転生して貰うとかそんな感じで合ってますかね？」

「本当に話が早いのう……ついでに言うと、特典で何個か能をやるぞ。一応詫びも兼ねておるのでの」

はいはい、テンプレ。

「なるほど。ちなみに転生先はどんな世界なんです？それによっては貰う能力が変わってくるんですが」

これは能力貰う前に確認せんとね。

貰ってからその世界じゃ使えませんでしたとか泣ける。

「うむ、それもそうじゃの。転生先はＮＡＲＵＴＯの世界じゃ。ちなみに産まれるのは木の葉隠れの里にしといてやる」

「……」

「どうかしたのか？」

「いや、なんか神様からＮＡＲＵＴＯとか言われるとメタいなーと」

「……仕方あるまい。お主ら人間の想像によって創られた世界じゃ。それ以外に表現しようが無い」

「へえ？なら他にも漫画などの世界があるんですか？」

人ってそんな力があったのね。さすが、人の想像力は無限とか言われてないね。

「うむ、有名どころではＤＲＡＧＯＮ　ＢＡＬＬやＯＮＥ－ＰＩＥＣＥかの。ＤＲＡＧＯＮ　ＢＡＬＬは本当に管理が大変じゃ……な

んじゃあれは。人や星を好き勝手に生き返らせたりしおって。こっちの身にもなれと言うに……」

なんか愚痴が始まりそうだぞ。これは早いとこ話を進めよう。

「神様？戻っておいでー」

「ん？ああ、すまんの。思い出したら腹が立っての」

……神様って大変なのね。俺、神になんか産まれなくてよかったわ。

「で、ＮＡＲＵＴＯの世界って事だけど、能力は何個くらい貰えるんですか？」

「特に何個かは決まっておらんが、常識の範囲内で頼む。チャクラ無限とか不老不死とか言われても無理じゃしの」

「へえ、そんな願いする気が無かったですが、無理なんですか」

「無理じゃ。人間の範囲を越える願いを聞き入れる訳にはいかん……なのに、最近の若いもんは無理難題を言う輩が多すぎていかん。夢を見すぎじゃろ」

ああ、また愚痴りモードに。神様ストレス溜まりすぎじゃね？

「はい、神様戻ってきてー」

「あ、ああ、すまんの」

「いえいえ、では貰う能力を言いますよ」

そう、言いつつ少し考える。

「えっとですね……やっぱりチャクラは多いに越したことは無いので、九尾くらいってできます？」

確認大事。ちゃんと一つ一つ確認しつつ貰わないとね。

「可能じゃ。しかし、いきなりその大きさのチャクラは無理じゃがな。成長と共に増えていき、成人の頃にはその大きさまでになるじゃろ」

なるほど。ま、人柱力でもないのにいきなりそんなチャクラがあったら人間辞めてますもんね。

「了解です。あとは……特殊な眼は欲しいですね」

これは、ＮＡＲＵＴＯの世界なら誰もが欲しいんじゃなかろうか。

「……写輪眼とかかの？」

「いえいえ、それじゃうちは一族になっちゃうじゃないですか。リクエストしたらその眼が手に入るか確認したいんですが」

「そうじゃの……人の範囲内であるならば可能じゃ」

……あの世界ってどこまでが人の範囲なんでしょね……輪廻眼とか人外だよね。

「……直死の魔眼って言って分かります？それを写輪眼とか白眼のようにオンオフできるようにして欲しいです。あと、写輪眼の動体視力やチャクラの流れを見る能力が備わってれば言う事なしなんですが」

強すぎず、弱すぎず、無双ができそうで意外とできない。そんな感じの能力がいいよね。

「……まあ、いいじゃろ。しかし、それもいきなり開眼はできんぞ

？ちゃんと修行をして目覚めるのが条件じゃ」

少し悩んでそう言う。

もちろんじゃないですか。いきなり無双したら途中でダレる。

「もちろんです。あとは、努力次第でどの分野でも一流になれる才能が欲しいですね。そんなとこです。あ、容姿の設定ってできます？」

欲をかき過ぎてもあれだもんね。でも、容姿はできるならイケメンしときたい。

「うむ、了解した。話が早いし無理難題は言ってこないし、お主は楽でいいの。じゃが、容姿に関しては無理じゃな。こればかりは両親の見目が良いのを願うんじゃな」

神頼みと言うやつじゃ。と笑う。……神様が。

「……貴方が神様じゃないですか」

呆れてさすがに突っ込んでしまったよ。仕方ないよね。

「ほっほ、比喩じゃよ」

そう言って笑う。ちなみに笑うと光がチカチカしてちょっと面白い。

「さて、もういいかの？よければ早速行ってもらうが」

あ、そうだね。ここで駄弁っても何にもならんね。

「はい、大丈夫です。お願いします」

さて、どんな人生になるのかな。楽しみだな。

「うむ、じゃあ始めるぞ。足元に穴が開いて落ちる事になるが、怖がる事は無いからの」

達者でな。という言葉と共に下に穴が開く。

「いってきます！」

最後にそう言って笑いかける。

これでもう会う事は無いんだろう。胃を大事にして元気でやって欲しいものだ。

「うむ、行ってこい。あ、ちなみに産まれる性別はランダムじゃからの。女になっても強く生きるんじゃぞ」

え？ちょ！

「ちょっと待てええええええぇぇぇ！！」

叫びがこだましながら俺は真っ暗な闇へ落ちていった。

プロローグ（後書き）

見切り発車で亀更新必至ですが、投稿頑張りたいと思います。

1話　我が家の朝

カチャカチャ、トントン、グツグツ、フフンフーンフン。
朝、台所では朝食の準備をする小気味いいリズムと母の鼻歌が聞こえる。
私は食器を出しながらその音を聞く。
産まれてから13年。ずっと聞いているその音は、家族を感じ胸が暖かくなる大好きな音だ。

「アキハ？そろそろできるから父さん起こしてきてくれる？」

母の声が台所からする。

「はい、母さん」

私はそう返事をし、父の眠る寝室へと小走りで向かう。
父は素晴らしい忍であるが、朝はあまり強くない。
強面の父が、寝起きで唸ってる姿がちょっと可愛いとか思ってしまう私はもう末期だろう。

「父さん、起きて下さい。朝ごはんができますよ？」

父は声をかけるだけでは絶対に起きないので身体を揺すりながら起こす。

「ううぅん、朝か？」

父のくぐもった声が布団の中から聞こえる。任務に出向く時のキリッとした声とのギャップが酷い。

「そうです。朝です。ご飯冷めちゃいますから起きて下さい」

そう言いつつ、再度揺する。

「うぅ……あと、5ふ「駄目です」うぅん……分かった、起きるよ」

今日は特に酷いな。

昨日、任務から帰ってきたばかりなので疲れてるから仕方ないのかも知れないが、それでも母の料理が冷める事は許されない。

ようやく起きた父が、まだ寝起きでフラフラするのか、のそのそと歩きリビングへ向かう。

傷だらけの頭の大男がのそのそと歩く様は、小さな子どもが見たら泣くかもしれないな。

などと考えながら父の後を追ってリビングへ向かう。

「あら、あなた。おはようございます」

リビングに入ってきた父を見て、母がにっこりと笑いかけながら言う。

うん、美人だ。なぜ、この野獣《父親》と結婚したのかが謎だ。

そして、心から母親似でよかったと思う。

「ああ、おはよう」

生欠伸をしながら食卓に着き、新聞を広げる。

「もう、準備終わりますからね」

「ん」

新聞を読みながら生返事をする父。

「あなた？ご飯の時は新聞は読まないで下さいな」

「ん」

またも生返事。

「あ・な・た？」

なんでだろうね、同じ笑顔のはずなのにここまで怖いのは。

「わかったよ」

父もそれを感じたのか、苦笑いをしながら新聞を畳む。

「ありがとうございます。アキハ？あなたはお茶の準備してくれる？」

新聞を畳んだ父にお礼を言い、私に話しかける。

それくらいお安い御用だ。未だ眠そうな父のためにも濃い目のお茶を入れてやろう。

「はい」

お茶を入れ、朝食の準備が完了する。

「「「いただきます」」」

うん、美味しい。

さすがは母。同じように作っても、いくら上手くいって美味しくても、母の料理には負けてる気がする。
多分、お袋の味ってやつなんだろうな。
ちなみにメニューは、父の好物のえのきが入った味噌汁、アジの開き、カブときゅうりの浅漬け、そしてご飯である。
オーソドックスだが、それがいい。

「そういえば、アキハ」

しばらく黙々と食べていた父が、思い出したかのように口を開いた。
なんだろう。

「はい、なんですか？」
「うん。もうそろそろアカデミーの卒業試験だったろう。大丈夫なのか？」

ああ、その事か。
卒業試験と言えど、分身の術レベルだぞ？
少し真面目にやってれば全く問題は無い。
まあ私の場合、少し真面目にやり過ぎたのだが。

「問題無いと思います。これでも私は優等生で通ってるんですよ？」

そう言って笑いかける。

「そうか。くれぐれも油断と慢心はせんようにな。忍になってからも、それは命に関わる」

満足そうに頷き、そう注意する父。
勿論である。死ぬのだけはごめんだ。２度目の人生、とことん謳歌したい。

朝食も終わり、のんびりとお茶をすする。
まさに至福タイムだ。この世界に緑茶があってよかった。

「アキハ、そろそろ準備する時間じゃないの？」

台所で洗い物をしている母に声をかけられ、現実へと引き戻される。
てか、そんな時間か。

「おっと、もうそんな時間か」

席を立ち、湯のみを下げて自分の部屋へ向かう。
机の上にあったカバンを持ち、リビングに戻り、弁当を渡される。
忘れ物は無い。

「それでは、父さん、母さん、行ってきます」

そう言って、軽くお辞儀をする。
なぜか、こんなお嬢様のような事をするのが定番になってしまったが、両親の目がいつもより暖かく感じるので良しとする。

「はい、頑張ってね」
「しっかりな」

両親も微笑んで送り出してくれる。

「はい！」

駆け足でアカデミーに向かいながら、今日は何が起きるのだろう、
今日のお弁当はなんだろう、と考える。
自分の周りは至極平和だ。
そして、優しい両親や友達に囲まれて幸せだ。

これでちゃんと男に産まれれば言う事無しだったんだけどな。

考えても、どうしようもない事をぼやきながら今日も駆ける。

1話　我が家の朝（後書き）

アドバイス等、頂けますと助かります。

2話　演習場にて（前書き）

たった1日で８００越えのユニーク。
正直、驚いています。本当にありがとうございます。
お気に入り数も目指せ二桁！だっただけに目標に届いてしまった…
…

2話　演習場にて

午後、私達は手裏剣の実習のために、アカデミーにある演習場へ来ている。
ちなみに女子の演習はさっき終わった。
ナルトがサクラの番で「サクラちゃん頑張れー！」とうるさかったり、私の番の時に、何人かの男子が「アキハ様ー！」と叫んでいた事なんて気にしない。気にしないったらしない。

男子も順調に進んでいく。
チョウジ・シカマル・キバと可も無く不可も無くといった感じ。
ま、シカマルはやる気の無いせいだろうけど。
シノはやっぱり優秀な部類に入るみたい。同級生の中じゃ抜けてる。

「次、うちはサスケ！」

あ、サスケの番だ。
ここは耳を塞いでっと。

「「「「「「キャーーーーーー！！！サスケくーーーーーーーーーーん！！！」」」」」」

うーん、女の子の歓声《喚声》って耳に刺さりますね。
や、自分も女の子なんですけどね。サスケのどこがいいのか分かんない。ムッツリっぽいし。

「はじめ！」

そんなくだらない事考えてたらもう始まるみたい。

サスケが手裏剣を持って構える。
それだけで何人かの女子が歓声をあげそうになるが、隣の女子が押さえる。うん、偉い。
そうしている内に次々と投擲されていく手裏剣。
それは、この年齢と下忍ですら無い事を考えると、異常な速度と正確性であった。
ほんの数秒で１０個の手裏剣を投げ終え、中心を捕らえ切れなかったのはわずかに２個。
天才うちはの名は伊達じゃないといった感じだろうか。
そんな感じで関心していると、背後から異常なまでの歓声があがる。
「「「「キャーーー！すごーーーい！さすが、サスケ君！！！」」」」
もう、これでもかってくらいの黄色い歓声が演習場に響く。
油断したよ。耳鳴りが酷い。そして頭がぐわんぐわんする。
つい最近、父に「油断と慢心は禁物」と言われたばかりなのにね。
ん、ちょっと違うか。

「静かに！次、瀬田コテツ！」

イルカ先生が注意と共に次の生徒を呼ぶ。
一回注意するだけであれを静めるとはさすがは教師と言った感じか。

「はーい」

間の抜けた声と共に前に出る男子生徒。
どう見ても「るろ剣」に出てくる縮地のあの子に見える。

「はじめ！」

掛け声と共に音の消える演習場。

そして、気がついたら全ての的の中心に手裏剣が刺さっていた。

「……え？」

誰かがそう声をもらす。

それも仕方あるまい。私にだって、なんとか見えたというレベルだ。普通のアカデミー生徒に見えるわけが無い。

「先生、できましたー」

そんな唖然とした空気に気付いてないのか、気にしてないのか、やった本人は間の抜けた声で先生に声をかけた。

「ん？あ、ああ、よくやった。戻っていいぞ」

目を丸くしていたイルカ先生は、それで現実に引き戻されたようだ。

「はーい」

そう言ってスタスタ元居た場所に戻っていく。

「すげー！コテツ！あれ、どうやったんだってばよ！？オレにも教えてくれ！！」

ナルトが興奮して叫んでいる。

それも仕方ないだろうね。今の彼じゃ、何がどうなったのか分から

ないだろうし。

「えっとねー。こう……シュパーン、シュタッ、スタタンって感じ」

……「ナルトに次ぐバカ」の異名は是故か。

「訳が分からねーってばよ……」

だよね。擬音で表現されても理解できるわけが無い。某ミスターじゃあるまいし。

「次！木川マサムネ！」

そうこうしてる内に次が呼ばれる。
この次のナルトでラストだったかな。

「はい」

クールと言った表現の似合う声で、どう見ても子どもセフィロスな顔をした生徒が前に出る。
その手にはやる気に満ち溢れているのか、既に手裏剣が握られている。

「あ」

そんな声と共に思い切りずっこける某セフィロス。

「「「「あ゛」」」」

そんな声をあげる周りの生徒達。
それもそのはず。彼の握っていた手裏剣がイルカ先生の手足や腹部に刺さっているのだ。

「「「「イ、イルカせんせえええええええ！！！」」」」

全員が全員叫ぶ。

「わ、わざとじゃ……」

起き上がり、それを見たマサムネはそう声をもらす。

「当たり前だってばよ！？わざとイルカ先生に攻撃するやつがあるか！てか、どうやって転んだら、後ろに立ってるイルカ先生に当たるんだ！？」

そう、彼は普通にイルカ先生を追い越し、指定位置に向かったのだ。そして、指定位置の直前で転んだ。普通に考えたら後ろで見守るイルカ先生に当たるわけがない。

「くっ……どうして俺はこうドジばかり」

そう、もらし俯く彼。

「ドジってレベルじゃねーってばよ！？これ！」

「皆！落ち着いて。イルカ先生も大した怪我じゃないからね」

補佐に就いてたミズキ先生が事態の収拾を図る。

「私は、イルカ先生を医務室まで連れて行くので今日はここまでにしよう。では、解散！」

ミズキ先生がそう言うと、皆が帰り始める。
まあ、これじゃ続けられないものね。

「え？ちょっと待って！オレってばまだやってねーぞ！？」

ああ、ナルト最後だったもんね。どんまい。

「……ふんっ、ドベのお前はやってもやらなくても変わんねーだろ」

なぜ、サスケは挑発するのか。

「ああん？どういう意味だってばよそれ！」

ナルトは本当に律儀に挑発に乗るし……バカばっかだね。

「ああ、あれだ。むしろ減点されずに済むからやらなくて助かったんじゃねーか？」

ナルトはもう限界と言わんばかりにプルプルと震えている。
きっとサスケに勝負を吹っかける流れになるに違いない。

「じょおとーだ、サスケぇ！表に出やがれ！オレと勝負しろってばよ！！」

……今、表だよナルト。

「バカが。今、表に居るじゃねーか……」

サスケは呆れた風にそう言い残しスタスタと帰り始める。

待てってばよおおおぉぉぉ！

演習場にナルトの叫びが木霊した。

今日も平和である。

2話　演習場にて（後書き）

瀬田コテツ、木川マサムネ

オリキャラ2人登場させました。

会話と文の継ぎ目と言いますか。

小説って本当に難しいですね……

3話　班分け（前書き）

オリキャラ追加です。
そしてキリのいいとこまでと思ってたら、結構な長さに。
そして、作者はおっさん燃え（萌え）なのを予め明記しておきます。

3話　班分け

閑話

早朝、まだ夜も明けて間もない頃、憮然とした面持ちをした老人と、悠然とパイプをふかす老人が火影の政務室に居た。
2人が黙り込んだまま動かなくなって、既に4半刻が経過している。

「はぁー……なんで引退した爺の自分が孫くらいの餓鬼の面倒を見なくてはならんのだ。のう、三代目」

黙りこくっているだけでは埒が明かんと諦めた、老人（仏頂面）が溜め息混じりに声を出す。

「そう言うな、伊賀翁。お主に預けたい子等は一筋縄ではいかん問題児でな。若い上忍では心許ないのじゃよ」

苦笑いを浮かべ、三代目と称された老人は言った。

「なんじゃ。うちはと九尾でも面倒見させる気か」

そんな面倒な事、御免だと言わんばかりに顔を顰める。

「違うわい。そこまで問題児では……いや、ある意味あの子等以上の問題児だとも言えるが」

そう言いながら、苦笑いを更に深める。
語尾が小さくなっていたのはご愛嬌といったところだろう。

「そんな問題児共なら余計に御免じゃ。他にやらせい」
自分はのんびり盆栽を育てたい。と盛大に顔を顰めながら言い放つ。
「まあまあ、一人は中々に優等生じゃし、それに3人とも素晴らしい才を持った子じゃ。お主、才能のある子を見るのは好きじゃろ？」
それはそうじゃが、と零す伊賀翁の声を無視して三代目が続ける。
「それに、ワシ等ももう長くは無い。ここで持ってる技を若い新芽の糧とするのも悪くは無かろうて」
のう？と穏やかに笑う三代目を見て、伊賀翁は黙ってしまう。
どれくらい時がたったのだろうか。
外からは里が起き出して活気のある声が聞こえ始める。
「……そうじゃの」
そう、ポツリと声をもらす。
「引き受けてくれるか」
もらした声だけで、老人には答えは分かっただろう。深い笑みを浮かべ確認をする。
「うむ、引き受けよう。しかしあれじゃぞ？自分は優しくできん性質でな。その子等が忍になれんでも文句は言ってくれるなよ？」
そう言いつつ、席を立つ。その顔には楽しそうな笑みが浮かんでい

た。

「もちろんじゃよ」

心配せんでもあの子等は立派な木の葉の忍となろう。
半ば確信を持って、そう考えつつ伊賀翁が出ていくのを見送る。

しばらく出て行った扉を見つめた後、彼は窓の方へと目を向ける。
眼下では、小さな子ども達が走り回ってるのが見える。

「元気があってよいの」

そう嬉しそうに微笑む瞳には、優しい笑みと暖かで穏やかな炎が灯っていた。

閑話　終

今日は合格者説明会だ。
いつものくノ一クラスでは無く、大教室へ向かう。

卒業試験？分身を三人出して、それぞれをイルカ先生、ミズキ先生、そして三代目様に変化をさせたら褒められた。
余裕すぎる。

それはさておき。

教室に入ると既にナルトとサスケが睨み合っている場面だった。
この後、本当にコイツらはキスをしちゃうんだろうか。
そんな事を考えていると、ナルトの後ろをマサムネが通ろうとする。

あ、こける。
椅子にぶつかり、よろけるマサムネ。
そして、咄嗟に手を突こうと伸ばした先には、ナルトの背中があった。

……

……

この後どうなったかは、彼らの名誉のためにも黙っておこう。
結果として言えば、ナルトがボロ雑巾のようになったと言う事だけだ。

現在、イルカ先生の班分けの説明がされている。
3人1班で担当上忍が付く。うん、原作通り。
班分けも、力が均等になるように先生が独断と偏見でもって決めたらしい。これも、原作通りだね。

1班、2班……と次々に班分けが発表されていく。
その度に、友人と一緒になれたかなどの一喜一憂する声があがる。

「じゃ、次7班」

お、主人公チームだ。
このチームに入らなければ、原作ブレイクはかなり厳しい。
だけど、やっぱりあの3人が一番しっくりくるとも思うんだ。

「春野サクラ……うずまきナルト！「ヤッター！」それと……うちはサスケ」
「しゃー！んなろー！！」

ナルトといい、サクラといい、もっと隠すというかそのー……ね？
オープン過ぎやしませんか。
その後ナルトがサスケと一緒な事に文句を言い、怒られるという一連のテンプレがあったが、滞りなく班分けは進む。
「次、８班いくぞー」
確か８班は紅班だったかな。
「えー……犬塚キバ、油女シノ、そして日向ヒナタだな」
キバはヒナタと一緒の班という事で小さくガッツポーズをしている。うん、ナルトとサクラは彼の慎ましさを見習いなさい。……ま、お相手のヒナタはナルトと一緒じゃないから少し落ち込んでるが。
「次、９班！」
お、次か。９班って原作に出てきてたっけ。記憶に無い。
「森乃アキハ……木川マサムネ！あとは、瀬田コテツだ」
おおう、私９班か。……てか、寄りによってあの２人と一緒か。
因みに１０班は、猪鹿蝶トリオだった。これも原作通りだね。順調順調。
午後、自由時間を経て私達はもう一度教室に集まっていた。

担当上忍を紹介して貰うためだ。
６班までは既に退室済み。が、７班の担当は来ない。うん、知ってた。

ガララッ

扉の開く音がし、女性が入室してくる。
やっと来たのか、とナルト、サスケ、サクラが顔をあげる。

「８班の子はこっちに来て」

なん……だと……と言わんばかりに目を見開いて唖然とするナルトとサクラ。顔を顰めるサスケ。
それをチラチラと横目に見ながら前に向かうヒナタ一行。
ヒナタがナルトに対して小さく手を振るが気付かない。……気付いてあげなさいよ。
落ち込んだヒナタを見ていると、担当上忍が「頑張ろうね」とヒナタの頭を撫でていた。
なに、あの班。羨ましいんですけど。

ガラッ

また扉が開く。
そして入ってきたのは１８０近くある筋肉質なお爺さんだった。

「９班はこちらへ」

あの人が担当なのね。

「……なんか、協調性の余り無さそうな面子じゃの」

集まった私達に一瞥をくれ、そう呟く。
……少なくとも私は人並みにあるつもりですけどね。
「まあ、ええ。行こうかの」
そう言って、スタスタ出て行ってしまうので、慌てて追いかけた。
私達は今、公園へ来ている。
「さて、それじゃあ自己紹介から始めようかの」
「じこしょうかいってなにを言えばいいんですかー？」
間延びした声でコテツが聞く。
なんかコイツの喋り方って平仮名多いな。
「そうさの……好きな事、嫌いな事、将来の夢や趣味ってところかの」
まずは自分から言うかの。と続ける。
「自分は伊賀三太夫。好きな事は…盆栽じゃな。嫌いな事は、盆栽を倒して逃げる野良猫じゃ。将来の夢は、いち早くお主らの担当を抜けて家でのんびりする事かの」
……なんか不合格にすると暗に言われた気が。
「では次、お主から順に行こうかの」

あ、私が指名された。私から順に左へって事らしい。

「森乃アキハです。好きな事は鍛錬と料理で、嫌いな事は……大切な人が傷つく事。将来の夢はアカデミーの教師です」

将来の夢が地味だって？いいんだよ。楽しそうじゃんか。

「うむ、では次」

「……木川マサムネ。好きな事は鍛錬。嫌いな事は……自分が偶にドジを踏む事。将来の夢は、ある巻物を探し出す事と、里に自分有りと名を広める事」

……ドジって自覚あったんだ。そして巻物ってなんだろう。

「では、最後」

「はーい、瀬戸コテツです。好きなことは、ねることかな。嫌いなことはー……無理矢理おこされること。将来の夢は、あんしんして眠れる世の中かなー」

将来の夢はいいと思うが、寝る事ばっかりだな。

心なしか伊賀翁も呆れた顔してるぞ。

「では、自己紹介はここまでにして、明日やる任務の内容を伝える」

お、サバイバル演習だっけ。

「それは、脱落率６６％以上の難関試験。サバイバル演習じゃ。脱落した者は問答無用でアカデミーに戻る事になる」

やっぱりサバイバル演習か。しかし、カカシ先生みたく、煽ったり

焦らしたりしないね。

「……驚かんのう。お主ら」

私達の反応が予想外だったのか、ちょっと驚いた風にそう呟く。

「さすがに分身の術のみで下忍になれるとは思えませんでしたので、何かあるんだろうな。と、考えてました」

私がそう言うと、他の二人も揃って頷く。

……マサムネは兎も角、コテツ。お前は本当にそう思ってたのか？ちょっと信じられないぞ。

「なるほどのう。まあ、自分は細かく説明する手間が省けたので助かったが」

その後、概要の書かれたプリントを渡され、朝食は吐くおそれがあるので抜く事を進める旨を言われた。

や、朝は食べますよ。

母に怒られますし、美容のためにもよろしくないですから。

3話　班分け（後書き）

感想、アドバイス頂けますと嬉しいです。

閑話　他の転生者の小話（前書き）

サバイバル演習に入る前に挟んでおきたかった小話です。

やっとまともに主人公の容姿を書けた……。

閑話　他の転生者の小話

俺、木川マサムネは所謂転生者と言うやつだ。
正直、ＮＡＲＵＴＯの世界の世界へ転生と言われた時は喜んだものだ。
ＮＡＲＵＴＯは好きな漫画であったし、何よりも忍術を自分で使うというそれに憧れた。
……まあ、原作ヒロイン達とハーレムとか考えなかった訳でもない。

容姿の方は神頼みとの事だったが、完璧だった。
母親譲りの白い肌と銀髪、そして通った鼻筋。
父親譲りのスラリとした体躯、そして鋭さのある眼。
それが絶妙な配置で受け継がれ、どう見ても世界的に有名なゲームに出てくる某悪役の顔であった。

これならモテる！
そう確信した俺は、まずキャラクターを演じる事から始めた。
つまり、クールで2枚目なキャラクターを演じるのだ。
これは常日頃からやってれば、いつかそうなるという期待もこめてのものだった。

だが、それは無駄に終わる。
俺は他人の視線が集まる場所に行くと、駄目なのだ。
兎に角緊張して、ヘマをしてしまう。
……お陰で俺が得た異名は「残念なイケメン」だ。こんなんじゃモテるわけがない。

おまけに神様から貰った能力の某慢心王の「王の財宝」は、

「これが素の状態でできたら人間じゃないから、口寄せの巻物として用意した。頑張って探せ」

と、後から来た神様の手紙で言われてしまった。
なんでも、自分の血筋のみに反応するよう設定したので盗難の心配は無いとか。
だったら最初から手元に用意しろと言いたい。が、これが代価というやつなのだろう。

お陰で自分にあるのは膨大なチャクラのみとなってしまった。
もうこれは普通に努力するしかない。
まあ努力の結果、同年代じゃ負ける気がしないくらいの力は得られたのでよかった。
……それが大衆の前で披露される事は、アカデミー内では無かったが。

ある日の演習場
俺は相変わらず、緊張の余りに足を縺れさせ、転んでいた。
男子は「またかよ」と言って声をあげて笑うし、女子も笑うのは我慢してるのだろうが、忍び笑いが聞こえる。
悔しい。
ここに居る人間の中でもトップクラスにやれる自身があるというのに、あがり症のせいで嗤われる始末。

悔しさで歯を食い縛りながら立ち上がらずにいると、隣から涼やかな声が聴こえた。

「大丈夫ですか？立ち上がらないけど怪我でもした？」

その声に反応し隣を見ると、同級生男子から「アキハ様」と評される人物が俺の目線まで屈んでいた。

正直、このアキハと言う少女には今まで興味が無かったと言っていい。
所詮、原作に出てこないモブの一人と考えていたのだ。
そして、その考えがどんな砂糖菓子よりも甘かった事を、至近距離から彼女を見てしまった事により痛感する。

燃えるように赤い髪を背中まで伸ばし、少しつりあがった瞳には宝石と見間違えんほどに美しい翡翠。
雪のように白い肌と、スラリと長く伸びた手足。……胸は、まだ成長期。

多分、俺はこの少女と出会うためにこの世界へ転生した。
そう錯覚してしまいたくなる程の凛とした美少女がそこには居た。

「本当に大丈夫？怪我が無いのなら続きをやったらどうですか？」

呆けてしまった俺に少し不審げな表情を浮かべ、そっと手裏剣を差し出す。
どうやら散らばった手裏剣を纏めてくれたらしい。……女神である。

「あ、ああ。大丈夫、ありがとう」

俺はなんとか返事を返し、手裏剣を受け取る。

「そう？緊張するのは悪い事じゃないよ。少しくらい緊張してた方がいい結果も出ますよ」

でも、貴方の場合肩の力を抜かないとね。と言いながら元々立っていた位置に戻っていく。

美人で優しい。完璧じゃないか。

確か、卒業後３人１班で分けたよな。あの子と一緒に是非なりたいものだ。

あ、でもそしたら班行動の際、四六時中緊張して色々やらかすんじゃ……。

俺は、そんな悩みを独りクールを装いながら班分けまで抱える事になる。

予断だが、その日の演習の結果は、いつもより格段に良かったと、ここに記しておく。

閑話　他の転生者の小話（後書き）

そんな訳でマサムネ君のお話でした。

ちなみに主人公のモデルは、紅赤朱の秋葉さんです。

コテツ君の話はまたいつか。

4話　サバイバル演習（前書き）

初の戦闘シーンです。
正直、自信無いです……ちゃんと描写できたかなぁ。
あと、視点が途中変わります。
主人公の視点で上手く戦闘が書けませんでした。精進せねば……！

あと、日間8位にランクインしてました。
何が起きたのか理解できませんでした。本当にありがとうございます！

4話　サバイバル演習

サバイバル演習の説明を受けた次の日。
私は少し早くに家を出た。
遅刻してくるのなんてカカシ先生くらいなものだろうし、３０分程前には着いて準備運動を済ませておこうと考えたのだ。

「おお、やっと一人来たか。遅かったの」

……なぜ居る。
私の家の時計が狂っていなければ、まだ時間まで３０分以上あるはずなのだが。

「先生、おはようございます。……間違いでなければ集合時間には３０分以上余裕があるかと」

遅れたどころか早く着いたのに、遅い呼ばわりされる筋合いは無いと言わんばかりにジト眼を向ける。

「うむ、おはよう。自分は１時間程前には着いていたのでな。少々待ちくたびれたわい」

そう言って、胸を張る伊賀老師。

……カカシ先生と真逆かよ。さすがにそれは予想外だよ。

もう、これ以上何かを言うのは時間の無駄だ。
私は、先生が仁王立ちして後の２人を待っている横でストレッチで身体を解し始める。

１５分程の入念なストレッチが終わったころ、２人が到着した。
集合時間にはまだ１０分以上あるが、皆時間前行動はできるようだ。
安心した。

「ようやく、残りも来たか。さて、説明を始めようかの」

ちゃんと時間前に来たのに、ようやく来たなどと言われ困惑顔の２人。
うん、私も混乱したさ。

「さて、ここに２つの鈴がある。今からお主ら3人でこの２つの鈴を自分から奪い取ってもらう」

そ知らぬ顔で説明を進める伊賀老師。

「言わなくても分かるかも知れんが、鈴は２つしか無い。取れんかった1人はアカデミー送りじゃな」

ま、３人共取れずにアカデミーに戻る事もあり得るがの。と言い放ち、ニヤリと笑う。

……挑発がお上手ですこと。

「時間は……そうじゃな。今から5分後の１０時から昼までにしようか。手裏剣、起爆札、なんでもありじゃ。殺す気で来んと奪えんぞ。……質問はあるかの」

特に無いけど……少し挑発に乗ってみようか。

「先生。先生の首を鈴代わりにするのはありですか？」
手を挙げ、私はそう言って挑発を逆にしてみる。……なんとも安い台詞だが。
「ほっほ、構わんぞ。首を取れたら三代目の所まで持って行け。したらお主らは中忍を飛ばして上忍になれるじゃろうて」
一瞬呆けた後、満面の笑みを浮かべそう返す伊賀老師。
……つまり、あり得ないって事ですね。
「もう、質問は無いかの？……無いようじゃな」
そう言って最終確認を取る。
「よし、時間も丁度いい。では……開始！」
合図と共に私達は四方へ散った。
……
……
さて、まずは他の2人と合流したい所なのだが、2人はちゃんと協力してくれるだろうか。
ザッ
ザザッ

もし、応じなかった場合どう説得するか思考を巡らせていると、逆に彼らから私の所へ来てくれた。
考える事は皆同じらしい。

「……どうする？」

マサムネが、いきなりそう切り出す。

「うーん……貴方達は何が得意？」

味方の得手不得手を確認しておくのは、作戦を立てる上で重要だ。
私は逆に彼らにそう聞いた。

「……俺は、両親が忍じゃ無いからアカデミーで習った以上の事はできない。しかし、その範囲であるなら全般的に平均より上だと言う自負はある」

「んー、ぼくは忍術はにがてかなぁ？でも、接近戦と速さならアカデミーのだれにも負けないよー」

……なるほど。

なら、コテツが前衛、マサムネが中衛、全体のフォローができそうな私が後衛かな。

「わかった。じゃ、コテツが前衛。マサムネが中衛でコテツのフォロー、私が後衛で牽制と全体のフォローをする感じでいいかな」

「いいよー」

「……俺がフォロー役か。責任重大だな」

コテツは相変わらず軽い。
マサムネは緊張してるのだろうか、表情が少し強張る。
「失敗したっていいんだよ？そのために私が後衛でいる訳だし。緊張してしり込みするより、チャレンジして失敗しよ」
私は、マサムネの緊張を和らげるためにそう言って軽く微笑む。
「……わかった」
なぜ、彼は顔を赤らめて俯くのだろう。
しばらく作戦の打ち合わせをし、大体の流れが決まった。
「じゃ、打ち合わせ通りに頑張ってみようね」
私がそう言ってしめると、２人は強く頷いてくれた。

ｓｉｄｅ　伊賀翁

彼らが散会してから、既に１０分以上経過している。
どうやら、一箇所に集まって作戦会議でもしておるようじゃの。
「ふむ、突撃して来んとなると……この演習の意味には気付いたのかの」

俺が俺がと、暴走して返り討ちに遭う子どもが多い中で、彼らは意図に気付いたようだ。
それだけで嬉しくなり、自然と笑みが零れる。

「！……作戦会議は終わったようじゃの」

3人が散会する気配を感じ、更に笑みを深める。
さて……どう来るか。

3人の気配は無い。
歴戦の勇士である自分が、通常の状態で探れない程には洗練されている。

……本当に優秀な子ども等じゃて。

木の葉の新芽はスクスクと育っている。それを身近に感じ、つい嬉しくなった。

ガサリ。

一瞬だが、右側の草むらが揺れる。
それにホンの僅かだが気を取られた瞬間、左側と真後ろから十数本の手裏剣が撃ち込まれた。

中々、だが甘い！

避けるのは簡単だが、ここで避けてしまっては続きが見られない。
一瞬でそう判断し、全てをクナイを持った回転で打ち落とす事にし

た。
回転で打ち落としてる最中、目端にこちらへ走り込んでくる人影を捕らえる。
なるほど、これを囮にしての接近戦か。じゃが、まだ甘ーッ！
先ほど草むらから飛び出すのを目端で捕らえ、それを迎撃しようと構えた時には既に目の前にいた。
ドゴォ！
上段へと思い切り蹴りが放たれ、それを何とか腕でガードする。
……コテツと言ったか。なんて、速さと重い蹴りじゃ。下忍のレベルなぞ軽く越えとるわ。
そうこうしてる内に彼は後ろへ回り込み、今度は下段へと蹴りを放つ。
上下左右、次々と放たれる蹴りや拳を捌きながら、彼を観察する。
ここまでのスピードを維持するためのチャクラコントロールは素晴らしいものがあるの。と考えた時、コテツに対し違和感を覚えた。
……こやつの足元にチャクラが集まっとらん。
素の状態でこの速さか！……なんとデタラメな。
本当に優秀な子どもじゃて、だがこれはどうかの！
魔幻・奈落見の術！

これは、相手の最も見たくない映像を、あたかも現実のように見せる術。
初歩クラスの幻術だが、上手くかかれば相手を気絶させるくらいはできる。

コテツは、幻術にかかったのか目の光を無くし、動きが緩くなる。
が、その瞬間にコテツの頬を1つのクナイが掠めた。

一筋の小さな傷を頬に作りながら我に返り、またも動き出すコテツ。

……あれは、アキハかの。
あの一瞬で幻術をかけたと見破り、無理矢理だが刺激を与え我に返す。僅かな間で、それだけやる判断力と観察力。楽しいのう。

我に返ったコテツは、またも速さを生かした速攻を仕掛け続ける。

……まだ一人姿を見せんが、どこにおるのか。

そう考え、目だけで周りを見ると、後ろから低い体制で一直線に鈴へ向かって突っ込むマサムネの姿があった。

「ッ！甘いわ！」

そう言い放ち振るった腕は、マサムネの身体をすり抜ける。

分身か！ならば、本体はッ！

更に横から手を伸ばす本体のマサムネ。

これはたまらん！

マサムネの身体を軽く蹴りつつ大きく跳び、距離を取ろうとする。

が、その空中にはアキハが既に詰めていた。

馬

虎

「なぬ！？」

アキハの紡いだ印を見て眼を見張る。

火遁・豪火球の術！

彼女の口から等身大程の炎が放たれる。

今は空中、つまり避ける場所は無い。

「チィ！」

軽く舌打ちをして、素早く印を結ぶ。

水遁・鉄砲玉！

軽くチャクラを練りこんだ水弾を出し、アキハの出した火球にぶつけた。

ぶつかり合った瞬間、水が蒸発し、辺りを水蒸気が包み込む。

そして

水蒸気が晴れた頃、その場には軽くハイタッチを交わすアキハ達と、うな垂れる伊賀翁の姿があった。

「やられた」

まさか、術を発動する所を狙われるとはの。
こんな事なら、彼らの戦術を見たいが為に「変わり身の術」を封印するんじゃなかったわい。
見事に鈴は取られてしまった訳じゃし合格は決定じゃが、最終確認はするかの。

「さて、見事鈴は取られてしまったわけじゃが。この演習の意図は分かったかの」

そう言うと、3人が姿勢を正しこちらへ向く。

「はい。鈴が2つなのは、わざと仲間割れをさせるためですよね？
そして、その状況下でも利害は関係なく協力できるか見るものだと考えました」

その言葉に揃って頷く2人。

……満点じゃな。

「よかろう。では、明日から任務を開始するぞ！今日はゆっくり身体を休めるんじゃ」

「「「はい！」」」

この子等がどんな大樹に育つのか。今から本当に楽しみじゃて。

「そうそう、任務の遂行は大切じゃ。じゃが、それ以上に仲間を大切にするんじゃぞ。皆で助け合いなさい」

それが巡り巡って自分を助けるからの。

自分のその言葉に、３人の元気な返事が返ってくる。

ほっほ、孫が増えた気分じゃ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

４人は並んで演習場を後にする。

その姿は、祖父の後を追う孫達のようであった。

4話　サバイバル演習（後書き）

初の戦闘描写でした。
感想、アドバイス等ありましたら是非お願いします。

5話　初任務とお団子（前書き）

アキハちゃんが壊れました。

どうしてこうなった。

5話　初任務とお団子

「目標確認。そちらではどう？」

私は、レシーバーを通して他の2人に確認を取る。

「こちらも確認した。いつでも行ける」

「ぼくも見つけたよー。まだ捕まえちゃだめ？」

2人とも見つけたらしい。てか、コテツは焦るな。

私達は今、里のとある路地に来ている。

細い路地を悠々と歩くターゲットを確保するのが任務だ。

「では、マサムネが前から突入。可能ならそのまま確保して。私は後ろから逃げ道を塞ぐ。コテツはフォローね。カウントは3からいくよ」

私が作戦を伝える。

演習の際に作戦立案をしてから、私が班長的な役割になったらしい。

面倒だが、メンバーを考えると仕方ないかな。

「了解」

「えー、ぼくも捕まえたい」

……コテツの性格を考えるとそうなのだろうが、ここは我慢して欲しい。

「そう言わないで。コテツはこの中で一番足が速いから全体のフォローをして欲しいの」

理由を言い、説得を試みる。基本、素直なのでこれで大丈夫だろう。

「んー、わかったー」

ほらね。

「じゃ、行くよ。3……2……1……GO！」

合図と共にマサムネが路地に突入する。

あ、滑った。

マサムネは転んだが、驚いてターゲットは反対側に逃げる。……結果オーライかな？

私も路地に突入し、向かって来る猫を確保する。

そう、私達のターゲットは猫なのだ。

名前はトラ。原作にも出てきた、あの猫である。

私は捕まえた猫を背中側から脇の辺りを軽く締めるように持つ。

こうすると引っ掻かれずに済むのだ。

「終わったかの」

初任務で醜態を晒し、落ち込むマサムネを2人で慰めている所に伊賀老師が来る。

……この人「こんな任務できて当然」と全く手伝ってくれなかった。
いや、できて当然なのは同意するんだが、少しは手伝って欲しいよ。
初めてなんだし。

「はい。無事に確保できました」

そう応えながら、確保した猫を見せる。
観念したのだろうか、猫は手の中でダラリと伸びていた。

「うむ、怪我もさせんようじゃったし、問題無しじゃな」

では、行こうか。と言い、スタスタと先に行ってしまう。
私は、まだ落ち込んでたマサムネを急かし、後を追った。

……

……

「三代目、終わったぞ」

任務を受ける部屋、集会所?に入るなり、長机に座る火影様にそう
声をかける老師。
前から思っていたがこの人、火影様にかなり気安い態度を取ってる。
年齢も同じくらいに見えるし、同期とかだろうか。

「うむ、ご苦労じゃ「トラちゃぁん!」……」

火影様が言うや否や、横から持っていた猫を引っ手繰られた。
目線を移すと、デ……ふくよかな女性が猫を抱き締め、頬ずりをし
ている。

「可愛いトラちゃん。死ぬほど心配したのよぉ～。もう逃がさないわよ～」

ああ……あんなに乱暴に扱って。
あれじゃ痛いに決まってる。証拠に猫も嫌がってるじゃないか。

あの子、ストレスとか大丈夫かな。猫ってストレスに弱かった記憶があるんだけど。
無事に逃げおおせて欲しいけど、そしたらまた任務で捕まえるんだろうな。……なんか泣けてきた。

「ゴホン！……では、賞金は横の受付から貰ってくれ。……さて、次の9班の任務は……うむ、幼稚園での臨時職員、公園の落ち葉集め、芋掘りの手伝いじゃな」

……それ、本当に忍の仕事ですか。
見習いだから仕方ないかもしれないけど、もうちょっとありません？

「よし、全部受けよう」

こちらが何かを言う間も無く即答してしまう老師。

いやいや、待って下さいよ。
もうちょっとやりがいのある任務にして欲しい。と私は老師を見る。
後の2人も似たような感じだ。

「そんな顔をするで無いわ。半日で終わる任務ばかりじゃし、残りは修行をつけてやるでの」
「……それなら構いませんが」

修行をつけてくれるのは有難い。
2人も納得したみたいだ。

「では、また明日来るでの」
「うむ、明日も頼む」

老師は火影様とそんなやり取りだけし、部屋を出て行いった。私達も後を追う。
あ、給金はちゃんと受け取りましたよ。
産まれて初めて稼いだお金だ。
後で両親に何かプレゼントを買おう。

……

……

「さて、初任務の成功祝いじゃ。食事でも馳走してやろうかの」

どこがええかの。

帰り道を4人で歩いていると、突然老師から言われた。
ご馳走してもらえるなら、あそこしかないだろ。

「花よりがいいです！」

花よりとは木の葉の里にある、有名な団子屋だ。
ちなみに、原作にも出てきた店と同じと思われる。
味はと言うと、これがもう凄い。
正直、麻薬と言っていいくらいに美味しい。

禁断症状じゃないかと言うくらいに、定期的に食べたくなるのだ。
母の大好物でもある。

あ、私がいきなり声をあげたので3人とも驚いてる。
だが、知らん。
私の団子への衝動はもう止まらない。

「花よりがいいです！」

私はもう一度主張する。
頭の中は既に団子モードだ。

「わ、わかったから落ち着け。2人も問題無いかの」

私を宥めつつ、2人に確認を取る老師。
失敬な。私は落ち着いている。これ以上なく団子を欲しているだけだ。

「別に構わない」
「いいよー」

2人も了承してくれた。
では、行こうか。さあ、行こうか。

「待つんじゃ。落ち着かんか！」

3人が追いかけてくるが、私の歩みは誰であろうと止める事はできない。

……

……

さあ、着いた。

私の頭の中は、みたらしから餡子まで、ありとあらゆる団子が占拠している。

そうだ、母にお土産として買って帰ろう。きっと小躍りして喜ぶに違いない。

「ただいまー」

……ん？

「あ、ここぼくの家ー」

コテツが振り返って笑いながら言ってきた。

……なんと。

と言うか、ご馳走されるのが自分の家の団子でいいのか。君は。

待てよ。

花よりはコテツの実家。という事はコテツと結婚すると、花よりの団子が食べ放題？

……いや、何考えた自分！落ち着け！！

そもそも男同士で結婚とかあり得ないってー私女だ！

それに、団子のためとは言え、コテツと結婚とか無理だ。そういう対象で見れるとは思えない。

しかも、私なんかを恋愛対象に見るやつが居るわけない。団子は客として食べに来ればいい。

そうだ、同じ班だし割引してくれるかも。うん、落ち着け。……うん、大丈夫。

「おかえりー。あら、その人達は？」

私が心を落ち着かせ、顔をあげると母親と思しき人物が出迎えていた。

「おなじ班のみんなと、その先生だよ」

うちに団子を食べにきたんだ。と相変わらず間延びした声で返すコテツ。

「あらあらあら、ようこそいらっしゃいました。うちの息子がお世話になっております。ゆっくりしていって下さいね」

お代は結構ですからね。と愛想よくお辞儀をする、コテツ母。

貴女が神か。

「あらあら、随分な美人さんが居るのね。あなた、息子のお嫁に来ない？」

済みません。不埒な思惑でそんな事考えました。済みません。

「むりだよー。それにぼく、マサムネに殺されたくないー」

……どういう事？

「あらま、そうなの？マサムネ君だったかしら。頑張りなさいよ？」

そう言って、マサムネの肩を叩くコテツ母。

……つまりそういう事？

や、無いでしょ。今まで接点なんて無かったわけだし。

ほら、マサムネも「は、はあ」なんて戸惑った返事してる。うん、無い無い。

……

……

「ご馳走さまでした」

私はそう言い、お辞儀をする。

「はい、また来て下さいね」

もちろんですとも。

お団子最高でした。何が最高かって？最高だったんですよ。

「はい、必ずまた来ます」

私はそう返し、帰路へつく。

因みに、お土産でお団子持たせてくれました。

光ったお爺さんなんて知らない。

彼女が神だ。

5話　初任務とお団子（後書き）

団子屋はコテツ君の実家でした。と言う回。

団子屋って原作で名前出てきましたっけ。
思い出せないので捏造しました。
「花より団子」で、団子屋「花より」
……ネーミングセンスェ

追記
原作に出てきた団子屋は「甘栗甘」と言うらしいです。
……アキハちゃんが勘違いしてたって事でお願いします。

6話　修行（前書き）

短めです。
無駄に話数を増やしたくなかったので、足早にしましたが、早すぎたかも。
難しいですね。

6話　修行

明くる日、私達は再び演習場に来ている。
もちろん、伊賀老師に修行をつけてもらうためだ。

「さて、お主らに教える予定なのは、自分の性質変化がどれに向いてるか調べるのと、影分身の術じゃ」

……公式チートが向こうからやってきた。
あ、でもここは知らない振りをしておいた方がいいのかな。

「先生、性質変化は分かりますが、影分身とは？」

私は、手を挙げ質問をする。これで知ってるなんてばれないはず。

「うむ。影分身とは、従来の分身とは違い、残像では無く実体を作り出す術じゃ。分身体の見聞きした事は術者の記憶として残るでの、危険な場所の調査や、スパイ活動の際に使われとる。お主らのチャクラ量も足りておるようじゃし、修行効率も考えて教える事にしたのじゃ」

なるほど。
確かに影分身出しながら修行すれば、その分短縮されますもんね。

「本来、下忍が使える術では無いが、そんなもん知らん。死ぬ気で覚えるんじゃ。よいの」

覚えないと修行は見ない。と言わんばかりである。

「「「はい！」」」

絶対に修行はつけて欲しいので、必死でやるしかない。
私達は早速修行に入った。

あ、因みに性質変化は最初に調べました。

私は、父に調べてもらってたので知ってるが、火遁。

マサムネは、紙が濡れたので、水遁。

コテツは、紙にシワが入ったので、雷遁。

水遁は攻撃から補助まで多そうなので羨ましいですね。
雷遁は……コテツはまだ速くなれるらしい。カカシ先生に千鳥教えて貰えないかな。無理だろね。

……

……

ようやく術の会得に成功した。
3日かかりましたよ。
ナルトが多重影分身を1日で会得してたっぽいので、大丈夫だと思ってた。正直、舐めてました。
3日での会得は多分速い方なんだろうけど、他の2人はもっと速かったので微妙だ。

マサムネは2日で、コテツに至っては1日で会得した。

早々に会得したコテツにコツを聞いたのだが、ブオンやらシュパーンやら擬音で説明された。
正直、心が折れそうだった。

マサムネにコツは聞きませんでした。
なんか、先に2人ができるようになって悔しかったので。

因みに、私ができるようになるまでの間、2人は老師に性質変化の基礎を教わっていた。
羨ましくなんかない！

「さて、全員できるようになったの。次の修行に移ろう。ああ、分身は2人出したまま維持するんじゃぞ」

分身解いて倒れるんですね。わかりました。

「「「せんせー、次はなにやるんですか？」」」

3人のコテツが同時に聞く。……中々にカオスだこれ。

「うむ、木登りじゃ」

……今更？
ああ、私にとっては今更でも2人は違うのか。
楽勝すぎる。木登り歴8年の私に隙はない。

「手を使わず、足元にチャクラを集めて、垂直に登ってもらう。」

まあ、アキハとマサムネはすぐに登れるだろうが。と続ける。

ここ数日、ずっと一緒に居たわけだし、分かりますか。

「では、初めてくれ」

その言葉と共に、私達は適当な高さの木へ近づく。

……おおう。3人になってるとチャクラも等分されるからかな。感覚が少し違う。

私はゆっくりと確認しながら、なんとか頂上まで登りきる事ができた。

マサムネも少し遅れて登ってくる。

コテツは半分ほどしか登れなかったみたい。下でやり直してるや。

「ふむ、2人は問題なくできそうじゃの。後は駆け上がれるようになるまで繰り返すんじゃ」

私達にそう指示をし、コテツのもとへ向かう。

どうやら、コツを教えているみたいだ。

……

……

それから4日間。

ただ、ひたすらに木を登り続けた。

私とマサムネは2日目には駆け上がれるようになったのだが、コテツがまだ駆け上がるレベルには達していなかったのだ。

老師は3人とも一緒に教える気らしく、コテツができるまで修行の続きに入る事はなかった。
待ってる間は、木登りの復習と老師との組み手で消費されました。

「よし、全員できるようになったの。次の修行、水面歩行の業に移ろう」

そう言って、老師が実際に水面に立ってみせる。

「木登りの時は、一定量のチャクラを練りこむ修行をした。これは、その応用。常に一定量のチャクラを放出する修行じゃな」

この修行も木登りの時と同じで、3分割されたチャクラ量だと感覚が少し違いました。

あ、これは皆1日でできるようになりましたよ。

ん?老師が上を見てる。
何を見てるんだろう。……鳥?

「うむ、水面歩行の業は問題ないようじゃの。では、自分は予定ができたでの。今日はここまでとする」

そう言って、さっさと行ってしまった。

んー、鳥?
なんだっけ。

6話　修行（後書き）

影分身を教えたのは修行の効率故です。
例え会得に時間かかっても、それ以上にアドバンテージがあるので。
禁術指定の多重影分身は教えませんし、今後覚える予定も無いです。

7話　中忍試験、開始（前書き）

中忍試験スタートです。

7話　中忍試験、開始

「突然じゃが、お主らを中忍選抜試験へ推薦しておいた」
私達は、いつも通り呼び出された。
そして、開口一番でこれを聞かされたのだ。
「ほれ、志願書。受験するかはお主らの自由じゃ。受けるものだけそれにサインして、明日の午後４時までに学校の３０１へ来い」
では、解散。と、伊賀老師は帰ってしまった。
……
……
「で、皆は受けるのか？」
いつまでも固まっていても仕方が無いと、言う事で３人で帰宅する最中にマサムネが口を開く。
「うんー、ぼくは受けるよ。楽しそうだしー……ね」
間が少し気になったが、コテツがそう応える。
「私も受けるよ。父さんみたく、立派な忍になりたいし」
他の理由も色々とあるが、当たり障りの無い返事をする。

やっぱり火影様は助けたいよね。あと、できるならサスケも大蛇丸の所へ行かずに済むようにしたい。
……でも、今の私の実力でなんとかなるのかな。
私1人じゃ無理かな。でも、班の皆も助けてくれるよね。優しい人達だもの。

「そういえば、アキハの親父さんは忍なんだっけ。どんな人なんだ？」

私が応えた事に反応し、マサムネがそう質問してきた。
心なしか、コテツも興味のある素振りをしている。
そっか、2人とも両親が忍じゃ無いからかな。

「んー、本当の実力はよく分からない。でも、特別上忍になるくらいだから凄いんだと思うよ。あと、家ではだらけてるけど、任務になるとキリッとしてカッコいい」

父はカッコいい。異論は認めない。

「まあ、任務見ないと実力分かんないよな。……そっか、カッコいいのか」

うん、カッコいいんだ。

「で、マサムネは受けるの？」

彼は自分だけどうするか言ってなかったので、私から聞いてみた。

「ああ、もちろん受けるよ。……皆一緒に中忍になりたいな」

だから、なんだその間は。

まあ、間については気にはなるが聞くほどでもないので放っておこう。

私達は、明日、アカデミー前で待ち合わせの約束をし、それぞれの家路へと別れた。

……

……

翌日、私達は３０１教室に居た。

なんか、普通に着きましたよ。

揉めてる連中を横目に階段上がって。

「何だ、お前等もこんなめんどくせー試験受けんのかよ」

「やっほー、アキハ」

「……」

どこに座るか教室中を見回していると、後ろから声をかけられた。

私達が振り向くと、シカマル、いの、チョウジの猪鹿蝶トリオがこちらへ来た。

シカマルは、相変わらずだるそう。

いのは、サスケを探してるのかキョロキョロしてる。

チョウジは、もう少しキレイに食べなさい。食べかすが落ちてるから。

「あら、猪鹿蝶じゃない。なんか久しぶり？」
私は、手を振ってそう応える。
「一緒くたにすな。めんどくせー」
……いいじゃん、猪鹿蝶。なんか仲良しっぽくて。
「シカマル、チョウジひさしぶりー」
コテツが2人に話しかける。仲良かったのかな？まあ、男子クラスだから当然なのか？
「おー、相変わらずめんどくせー喋り方だな」
……仲良いんだよね？
「そう？」
「なんか、お前と話してると力抜けんだよ」
「えー？でも、シカマルの力が抜けてないときってあんの？」
「……ねーな」
……私は君達の会話を聞いてると力が抜けるよ。
あと、チョウジは食ってないで喋れ。
「サスケ君の匂い！」
……え？
あ、いのが走って行ってしまった。
え、匂いでサスケ見つけたの？何その特殊能力。

仕方ないので、私達はいのが走って行った方へ向かう。
私達が着くと、丁度いのとサクラがいがみ合ってる所だった。
「何だよ。お前等までこんなめんどくせー試験受けんのかよ。死ねよ！」
言葉が汚いのは仲が良い証拠だと思っておこう。
「なんだぁ、オバカトリオとドジっ子トリオか」
「その言い方はやめー！」
「ドジっ子なのはマサムネだけ！」
失敬な。私とコテツはドジっ子では無い。
「……どうせ、俺は」
あ、マサムネが落ち込んでる。ごめん。
ここはフォローしておこうか。
「あ、ごめん。マサムネも自信持って？ヘマしたのも最初の任務だけだったし」
そう言いながら、マサムネに近づく。
「ひゃっほ～、みーっけ！」
少し離れた所から、また声がした。
確か、この声はー。

「こ……こんにちわ」
「これはこれは皆さんお揃いでェ！」
「……」

やっぱりキバか。
そして、シノもやっぱり喋らないのか。
ヒナタも変わらんね。まあ、大人しいのは良い所だと思うけどね。
「なるほどね～、今年の新人下忍１２名、全員受験ってわけか！」
とは、キバ。

その後は、自分達の近況報告に花を咲かせた。
同期の皆に会うのは久しぶりだったからね。

「おい君たち！もう少し静かにした方がいいな」

私達が談笑していると、そう声をかけられた。

あ、カブトだ。死ねばいいのに。

その後、カブトに注意されたり、認識札を見せてもらったり、音忍に喧嘩を売られたりしました。
音忍はカブトに攻撃を入れて、ドヤ顔してたけど小物にしか見えなかった。

「静かにしやがれど腐れ野郎共が！！」

お？

声と共に試験官が現れる。父来た！これで勝つる！

「待たせたな……中忍選抜第一の試験、試験官の森乃イビキだ」

ああ、皆怯えてる。

まあ、あの傷だらけの顔だもんね。耐性が無いと厳しいか。

「音隠れのお前ら！試験前に好き勝手やってんじゃねーぞコラ。失格にされてーのか」

音忍へ指をさして注意する父。

それに対して音忍も謝っているが、誠意は無い。

「いい機会だ、言っておく。試験官の許可なく対戦や争いは有り得ない。また、許可が出たとしても、相手を死に至らしめるような行為は許されん。オレ様に逆らうようなブタ共は即失格だ。分かったな」

父がカッコよすぎて生きるのが辛い。

「……なんか甘っちょろいな、この試験」

音忍の君。君が甘いよ。どSの父が簡単に終わらせる訳が無い。

その後、原作通りに番号札が配られ、筆記試験に入ろうとしている。

確かこの試験、解いても意味無いんだよね。

あ、他の2人は大丈夫かな。……うん、祈ろう。

しかし、テストはどうするかな。

真面目に解いてもいいんだけど。あ、父の良さを10個あげて論述するか？

……いや、後で怒られそうだからやめよう。
うん、真面目に解こう。

その後、試験のルールが説明された。これも原作通りだったよ。

1、各自、持ち点は１０点。試験は全１０問・各1点とし、不正解の数だけ点数が引かれる。減点方式。

2、試験はチーム戦。班の合計点で競われる。

3、「カンニング、及びそれに準ずる行為をおこなった」と見なされた者は、行為1回につき2点ずつ減点される。

4、持ち点が０になった者が出た班は、道連れで3名共不合格とする。

「試験時間は1時間だ。よし……始め！」

中忍試験が始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6635z/

ナルトの世界に転生する事になった訳だが

2011年12月30日01時47分発行